

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

|            |   |
|------------|---|
| Title      | 今堀誠二の中国史研究と核兵器反対運動：1945 年前後を中心として   |
| Author(s)  | 水羽, 信男  |
| Citation   | アジア社会文化研究, 23 : 1 - 20  |
| Issue Date | 2022-03-31  |
| DOI        |   |
| Self DOI   | <a href="https://doi.org/10.15027/52266">10.15027/52266</a>                                       |
| URL        | <a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00052266">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00052266</a> |
| Right      |   |
| Relation   |   |



## 論説

# 今堀誠二の中国史研究と核兵器反対運動 —1945 年前後を中心として—

水羽 信男

### はじめに

今堀誠二は 1914 年に大阪で生まれ、父親の広島市立第一高等女学校への赴任により思春期を広島市で送った。昭和初期のモダンガール・モダンボーイの時代の波は地方都市・広島へも伝播していたが、今堀は戦争とともに成人し、敗戦の年には 31 歳であった。いわば「大人」として戦争の遂行と敗北の責任の一端を担った世代である。

『日本大百科全書(ニッポニカ)』は、今堀を以下のように紹介している<sup>1</sup>。

東洋史<sup>2</sup>学者。大阪府生まれ。[1932 年広島高等師範学校入学、] 1939 年(昭和 14) 広島文理科大学(現広島大学) 史学科卒業。その後、中国、北京師範大学[非常勤] 講師となり、中国の封建社会制度の研究を進める。[1943 年に広島文理大講師。] 1951 年広島大学[教養部] 教授、のち広島女子大学(現、県立広島大学) 学長となる。1949 年広島平和擁護大会議長につき、原水爆禁止運動を積極的に推し進め、同運動の理論的指導者として、原爆の実態調査や広島大学平和科学センターの設立に尽力した。著書に『中国封建社会の機構』『原水爆時代』『毛沢東研究序説』『中国封建社会の構造』などがある。1992 年 10 月 9 日没([ ]内は筆者注、以下、同様)。

上記の情報に追加すれば、1980 年に日本学士院賞を受賞している(2021 年 12 月段階で広島大学に在職した研究者で同賞を受賞しているのは 7 名)。この簡単な履歴からも理解できるように、今堀の思想と行動は、中国を歴史的に研究することが、広島という地域に根ざして平和の問題を考えるうえで、

いかなる意味を持つのかという問題群を考えるための視座を与えてくれる。

同時に今堀は、本誌を発行するアジア社会文化研究会のメンバーの多くが所属する総合科学部（総科）の設立（1974年）をリードした一人であった。広島大学のウェブページは、総科を「総合科学」の理想を掲げ、現代社会において強く求められている「総合的知見と思考力」を養うために創立された、国内随一のユニークな学部」だと紹介しており、その創設時には社会文化、情報行動科学、環境科学の各コースとともに、地域文化コース<sup>3</sup>が設立された。

今堀は地域研究について、日本の戦前の研究方法を再検討しながら、米国で台頭しつつあった地域研究（Area Studies）が「[アジアに対する]外からの批判ではなしに、アジアを内面からとらえ、アジアの「独立性」を尊重し、「同盟者」としてアジアとアメリカの関係を考えつつ、米国の国益に合致するアジアを作り出すための有力な道具になっている「危険」性を指摘し、「アメリカの東洋学を止揚することは、学問的な意味だけでなしに、アジアの独立と世界の平和のためにぜひなしとげねばならない課題」だと強調している<sup>4</sup>。

今堀にとって総科の地域文化コースは、「現代的視点に立ってアジアの全体像を、共同研究によって再構成しよう」という今堀の理念の実現化の取り組みであり、世界の平和に寄与すべきものだったのである<sup>5</sup>。

一般教育の存在意義についても、今堀は米国のカレッジを念頭におき、リベラルアーツの重要性を次のように論じている<sup>6</sup>。

[たとえば] 最初から最後まで工学ばかりやっていたのでは、才能の花は開きません。勿論現在でも工学部の学生は物理を勉強しています。しかしこれは工学部の勉強の準備教育として、さきほどの基礎教育的な意味での物理をやるのであって……少なくとも物理学をやるというのは、一年で物理をやり、二年でも三年でも四年でもやる、勿論ゼミナールもやれば実験もやって、一応、物理学とは何か、物理的発想、物理的理解、こういうものに対する深い訓練を経た人間が工学に進んだとき、その工学において独自の能力を発揮する、これが一般教育の持つ意味です。

今堀にとっての総科の存在意義は、個別の学部としての学際的な研究の推

進、またそれを担い上げる人材の養成だけに止まらず、あるべき教養教育の実践であったのである。今日、今堀の思想と行動とを振りかえることは、総科の存在意義について考えるうえでも、意味あることではなかろうか。

## 1. 広島から北京へ、そして広島で：中国研究者としての自立

今日の中国研究の到達点からみて、今堀の研究成果に、不十分な点があることはいうまでもない。今堀が強調した「共同体」や「ギルド」、「封建制」についても、今日では中国における存在を否定したり、日本と中国との社会的な違いを強調する見解が多い。

だが中国史について考えるとはどういうことかという点に関しては、今日でも今堀を取り上げる意味はあると筆者は感じている<sup>7</sup>。とはいえ中国をめぐる論壇の現在におけるオピニオンリーダーの一人・岡本隆司は今堀を厳しく批判する。いわく今堀の研究方法は「ア・プリオリに西洋概念の「ギルド」を基準とする視角・観点であって、……[その研究は中国そのものに対する]独自の関心・考察・理解に向かわない」。岡本によれば、戦前の京都帝国大学の内藤湖南(1866-1934)や、戦後の京都学派といわれた谷川道雄(1925-2013)のように、中国の固有性・独自性について考えようとする姿勢が、今堀には弱かったということになる<sup>8</sup>。

とはいえ広島文理科大学の東洋史研究室は、もともと京都帝国大学の影響が強く、今堀の指導教官の杉本直治郎(1890-1973)も京都帝大出身だった。その杉本の「宿題」として、今堀は日中全面戦争が始まる年である 1937 年に「東洋史の時代区分」を執筆している<sup>9</sup>。このテーマが杉本から学生に課せられた背景には、当然、内藤湖南の唐宋変革論の提起があった。

今堀の中国史研究者として最初の業績は、広島文理科大学に提出した卒業論文をまとめたという「唐代士族の性格素描」で、『歴史学研究』第 9 巻第 11 号(1939 年)、第 10 巻第 2 号(1940 年)に掲載された。また 1939 年から 41 年まで外務省派遣留学生として、研究テーマを「宋代の倉制及村落制」と定め、日本占領下の北京で 10～13 世紀の中国における社会的な救済制度と村落制度について研究していた<sup>10</sup>。つまり中国史研究者としてのスタートにあたり今堀は、唐朝から宋朝への社会変化を、すなわち 10 世紀を画期と

する数世紀間にわたる中国社会の変化をどのように歴史的に位置づけるのかという、当時の東洋史学の王道ともいえるテーマに取り組んだのである。

その過程で、今堀は従来の東洋史学の研究方法に疑問をいだき、社会調査の必要性を認識し、東京帝国大学の中国法制史研究の泰斗・仁井田 陞<sup>のぼる</sup>（1904-1966）の調査に同道したり、自身で内モンゴルの調査を実施したりするようになった。この点について、敗戦後になって、今堀は北京留学時代の史料との格闘の経験に即して、次のように説明している<sup>11</sup>。

どんなに信頼できる書物であっても、「客観的」に何かを記録に残そうというようなケースは、のぞみうべくもない。すべての書籍は、意識すると否とを問わず、いずれにしても何かを主張するために作られた「論文」である。……書物にかかっている「事実」は、額面通りにうけとるべきではなく、著者がどういう動機から、こうした「事実」を持出したかを考えた上で、正しく理解せねばならない。

こうした議論は今日的にも重要な示唆に富んでおり、歴史学者として今堀は民衆の生活を理解するための史料、そして官製史料の不十分さを補うための史料を発掘するために、フィールド調査をおこなったのである。史料の重要性について今堀は、敗戦前に脱稿したというエッセーで、留日の経験を持ち中国共産党系の知識人であった郭沫若（1892-1978）に触れつつ、結論部分では「馮友蘭 [1895-1990] がいみじくも指摘して居る様に、現在の段階では事実を以て理論を証明すべきであって、理論を以て事実を判断してはならないのである」と強調している<sup>12</sup>。

ちなみに馮友蘭は米国留学を経験し新儒家とも言われたが、敗戦後も今堀は中国「哲学界のホープは……胡適博士ではなく、中国古典哲学を西洋哲学の方法によって思弁し、新しいヒューマニズムに到達した馮友蘭教授に移って居た」と述べ<sup>13</sup>、さらにリベラル派知識人としても名高い人類学者・費孝通（1910-2005）や、歴史学者・呉晗<sup>ごがん</sup>（1909-1969）の学術的な著作を高く評価している<sup>14</sup>。今堀は中国の論壇の動静にも、関心を払い続けていたのである。この点に日本国内の中国史研究の検討で事足りれとせず、同時代の中国の思

想界の動きにも、広く関心を持ち続けた今堀の立場が示されている。

結局、今堀にとっての研究の目的は「古今東西あらゆる文化があや目も定かでないほど乱れ入って居るが然も結極中国に存する者は中国文化以外の何物でもない」という中国社会の特質を理解することであり、その探究のための方策をフィールド調査も含めて模索したのである<sup>15</sup>。そして1940年代の日本における「近代の超克」にも影響されながら、日本による新たな科学の建設の必要性を以下のように指摘する<sup>16</sup>。

資本主義と共にあった近代科学であった。その近代科学がその社会的地盤たる米英資本主義と共に葬られるべき日は予想以上に早く来た。支那事変に続く大東亜戦争が、この問題に決定的ポワン〔フランス語。英語のピリオド〕を打ってしまつたのである。……近代科学が無に帰した以上、我我も亦無から出発し直さなければならない。生れ出づべき科学は未だ嬰兒に過ぎない。

さらに敗戦前に執筆されながら戦後において否定されなかった、先に紹介したエッセーのなかでも、「封建社会と共に滅んだ支那学、資本主義社会と共に没落した近代科学を以て豊かな肥料とし、新文化の一翼たるべき、中国社会の理論構成への、夢多き同志の為に、資料学に沈潜する事を、世代は我々に要求している」と論じている<sup>17</sup>。

今堀の資本主義批判は、当時の「近代の超克」論と同様に、共産党を支持するものではなく、国際関係における米英との抗争が、思想的には資本主義批判と等置されており、日本による新たな世界史の構築のなかで、先進資本主義国で現れた貧富の格差の拡大などを是正しようとしたに過ぎない。たしかに敗戦後の一時期の今堀には、マルクス主義史学の影響を受けた記述が目立つ。しかし、今堀の思想と行動は、広義の社会主義の範疇にあっても、共産党とは本質的に別のものであった。

いずれにしても、如上の模索のなかで、今堀は“中国とは何か”という問いを掲げ、歴史学者として既存の文献資料に満足せず、その批判的検討を必須の課題とした。彼はそのために歴史学以外も含む最新の学術動向を追い、

日本国内に止まらず米国や中国にも関心を広げ、その研究成果を摂取するなかで、自分自身の研究方法をたえず問い直し、学際的に分析方法を鍛錬しようした。この点において、今堀は戦前から一貫していた。

では、そもそも研究とは、いかなる意味をもつものなのだろうか。またなぜ中国を研究しなければならないのだろうか。管見の限り、今堀が敗戦前後にこの点について自ら明確に説明したものはないが、当時の断片的な記述から類推してみたい。まず今堀にとっての学問研究の意義に関して、本稿との関係で興味深いのは、1938年2月22日付の「ジャン・ジャック・ルソーの再批判:彼の国家主義的傾向に就いて」と題された学生時代のレポートである。

当時は、昭和恐慌(1929-31年)から満州事変(1931年)を経て、二・二六事件(1936年)に象徴されるように、アジアではじめて二大政党政治を実現した日本の議会制民主主義が揺らぎ、軍部の発言力が増していた。同時に国際的には日独防共協定(1936年)、日独伊三国防共協定(1937年)によって、英米との対立が深まりつつあった。そして盧溝橋事件(1937年)以後の日中全面戦争は、速戦即決を信じた軍部や国民の願いを裏切り、長期化・泥沼化していた。

今堀はこの時期を「非常時局」とみなしており、その変革を目指した昭和研究会などに代表される思想潮流に影響されていたように思われる。たとえば、冒頭、次のような問題意識が披瀝される。

現代は総てが「最後の関頭」に立って居る。……私一個人の思想としても、はげしい思想界の流れに押されて或は左し、或は右し、蹣跚たる足どりで危く足をすくはれかけつつも、純正なる日本精神の糸をたぐりたぐりして、とも角惜しからぬ生をぬすんで居る(3-4頁。なお傍点は原文のママである。以下、同様)。

こうした混乱から脱するために今堀が向き合ったのが、「徹底した個人主義者自然主義者革命主義者と見られて来た」ルソーであった。今堀は「この従来の見解は前世紀の安易軽薄な自由主義者にとっては然るべき答案であっただろうが、我々現代に通ずる手札ではない」と断ずる(5,7頁)。そして次

のように総括する。

ルソーは自由主義者である。しかし真の意味の自由主義者である（44頁）。……真の自由は真の服従であり、自由民は忠誠な愛国者でなければならぬのである。民約論に於いて「人は唯正当な権力にだけ服従すべきであると言う事を認めることにしよう」と言って居るのはこの論理を一層限定したものと見る事が出来やう。（51-52頁）……

その自由は消極的には進んで国家・国憲への服従をなすと共に積極的には国家の完全結合の基礎をなすものである。（56頁）

このレポートに対する評語には「Rousseau の国民主義的傾向についてあまりに過重評価は慎むべきではないか」とある。サインから推測するとこの評語は、千代田謙（1899-1980）のものと思われる。千代田は東北帝国大学を卒業し、広島文理科大学・広島大学で教鞭をとった西洋史研究者である<sup>18</sup>。今堀のルソーの個人主義批判に対する千代田の評価には、大正デモクラシー期に思想形成を遂げた教官と、今堀たちとの間の世代的なギャップを示唆しており興味深い。

いずれにしても 20 歳代前半の学生が、しかも専門外の問題について書いたレポートを大げさに捉える必要はなかろう。しかし上記のような結論部分に当時のインテリ層の思想傾向の一端が示されており、日本の、そして日本人の在り方についての一青年の情熱が示されている、とはいえよう。今堀の学問への情熱は、真の自由主義者として国家へ貢献したいという愛国心に導かれていたのである。

では今堀にとって中国史研究の意味はどこにあったのか。今堀は広島文理科大学で職業研究者としての生活を始めたが、戦後の今堀は「1939 年から 1944 年まで中国に滞在したことは、はからずも素朴な一愛国者を目覚めた人間に育てあげることになった」と述べたうえで<sup>19</sup>、中国社会の実態、つまり中国人がどのように日常生活をいとなんでいるのか、を解明することの重要性を強調する。そしてその研究の究極の目的は、日本社会の理解へと広がるものと想定されていたようで、次のように論じられた<sup>20</sup>。

過去の中国において、目に見えない網の目となって、人間の基本的自由を束縛していた所謂「共同体」体制が、今日もなお日本の民衆を封建制の枠の中につなぎとめる手かせ足かせとなっていることに、多くの日本人は気付いていない様である。静岡県の「村八分」は映画までになったが、封建的な社会体制の下に生活している人は、その臭気に気付かないのであって、我々は村八分を強行するボスの無反省をのしる前に、自分自身が実はそのボスと同じ穴のむじなであることを、考え直して見る必要がある。

既述のように今日では「共同体」であれ、「封建制」であれ、その理解は今堀の時代とは大きく異なり、安易に日本社会と中国社会とを等置できないことは当然である。だが、当時の今堀として日中両国の社会の異質さを十分理解していた<sup>21</sup>。そのうえで日本において個人が社会から自立していない現実を直視するためには、日本だけを見ていたのでは不十分で、中国について理解することが有益だと考えていたのである。

さらに今堀にとっては、国際社会を理解するためにも、中国研究が必要であった。たとえば1950年に次のように今堀は強調している<sup>22</sup>。

我々としては、東洋の問題は我々自身の問題であり、東洋の歴史は、私の上にもそのままの姿でおしかぶさって居るのであって、……東洋史研究が世界史の一環としてのみ成立することが出来、又これからの世界研究は、東洋に主力を注いで行かねばならない事は、決定的に言える。

1960年代以降になると、今堀の中国・アジア研究の対象は、中国社会とはいかなる社会かという問題群だけでなく、その中国を変革しようとする近現代の諸勢力についての分析にも向かった。その分析内容の検討は本稿の考察の範囲からは外れるが、研究を進めてゆく問題意識の根幹は、1950年代までに確立していたように思われる。それは東洋史学の存在意義の探求であった。今堀は大衆に寄与し、「大衆から支持される」<sup>23</sup>ためには何が必要か、という

点を敗戦後（おそらく戦争中から）問い続けたのである。

たしかに、今堀は日本の中国侵略と 1945 年の敗北の結果を受けとめ、「学者に負わされた社会的責任」を強烈に意識した。そして自らの方法的なブレの無さに自信を持っていたがゆえに、今堀は時に他者を厳しく批判し、時に独善的にみえる議論を展開することもあった。だが、人文科学の存在価値が問われる 21 世紀の今日において、中国史研究が「学問の基礎理論」の深化にいかなる役割を果しうるのか、また個々の研究者にとって、自己がアイデンティティを持つ国家の「国民の運命から遊離」しない態度をとるとはどういうことなのか、考え続ける必要があるだろう。

## 2. 広島から全国、世界へ：核兵器反対運動のリーダーとして

1945 年 6 月に今堀は陸軍に召集され、「八六」には山口県で米軍の上陸に備えていた。敗戦後の 9 月、日本各地に甚大な被害をもたらした枕崎台風の来襲時には、臨時憲兵として宮島の対岸の大野の陸軍病院などの復旧活動にあたり、11 月に広島市へ復員できた。こうした軍隊経験も、戦後の「平和運動」に今堀を駆り立てたことは、容易に想像される（以下、「」は省略する）。とはいえ戦後の平和運動はさまざまな姿をみせていた。ここでは 1950 年代の今堀の議論に即して彼の平和運動の立ち位置を確認しておきたい。

ところで、筆者が原子力エネルギーと戦争をめぐる異なる立場の区別の必要性にこだわるのは、個々の論者の立場を明らかにしなければ、戦争も核も全面的に認める立場に反対する平和運動に、無用の混乱が持ち込まれると考えているからである。その立場とは、①あらゆる戦争に反対し、平和利用も含め核を全面否定する、②すべての戦争と核兵器に反対するが、核の平和利用は認める、③自衛や独立のための戦争の必要は認めるが、核兵器の使用には反対する（核の平和利用については賛否の 2 つに分かれる）の 4 つである。

今堀は核エネルギーの実用化は、人類史を画するものだと理解している。たしかに、それは人類を絶滅させ、地球を破壊する暴力的な兵器を作り出した。しかし当時の今堀において、核エネルギーの平和利用は生産力を飛躍的に高め、そのことによって人類に平等をもたらすべきものであった。被差別部落の問題も、原子力によって解決されるはずで、今堀は次のように述べて

いる<sup>24</sup>。

人間が自然を克服出来ない以上、部落問題の解決も不可能の様に思われる。……人間の優位を決定的にしたのは原子力の解放であった。自然に制約されていた人類前史が今や終り、人間の本当の歴史が始まろうとする、その「飛躍」の瞬間が、原子力時代であって、部落解放も、この時から可能となったわけである。

今堀にとって、核エネルギーの平和利用は、「明るい光に包まれたバラ色の夜明けを迎える」はずだった（前掲、今堀『原水爆時代』上、247頁。以下の記述では、『原水爆時代』からの引用は、上巻（1959年）の場合は（上：247頁）、下巻（1960年）の場合は、（下：1頁）のように記す）。

だが、2011年の東京電力福島第一原子力発電所の炉心融解事故を経た今日では、今堀の議論は楽観的に過ぎるかも知れない。とはいえ、こうした議論は、当時は決して珍しくなかった。ソ連の核武装が米国の核攻撃を抑止する役割を果たしたと考えられ、同時に核の平和利用が語られるなか、反戦詩人として名高い峠三吉（1917-1953）も、核の平和利用を賛美する詩を1951年に自費出版した『原爆詩集』のなかで発表している（1952年に青木文庫として増補版が発行された）<sup>25</sup>。

このように今堀は原子力エネルギーそのものを肯定したうえで、核兵器の保持・使用に対して断固たる反対の立場を示したが、被抑圧民族の自衛・自立のための核兵器を使わない戦いを否定してはいない。その意味で、戦争そのものを完全否定したわけではなかった。今堀の核兵器反対運動の原点は、「真珠湾の軍艦に対する攻撃と、人類滅亡の危険性をおかす原爆攻撃とを、同じ次元において考えてよいものか否か、そうした区別が明瞭になっていない以上、現代を正しく知っているとはいえない」という記述に象徴的に示されているといえよう（上：171頁）。本稿のタイトルを核兵器反対運動としたゆえんである。

今堀の平和運動論の第一の特徴は、日本のアジア侵略を前提としているこ

とである。たとえば日本国有鉄道（現在の JR）の労働組合という政治意識の高い団体のメンバーでも、1951 年段階では自国優先、アジア軽視の傾向があったことへの危機感を今堀は表明している。すなわち朝鮮戦争中の、そして日本の主権がいまだ回復されていない段階でのアンケートで、日本の左翼的な労働者は、日本の独立を求め、在日米軍基地に反対の意思を強く示した。しかし、その絶対多数が米国の中国への原爆使用について、断固たる反対の態度を示したのではなかったのである（下：89 頁）。

さらに 1958 年の第 4 回の原水爆禁止世界大会については、以下のような指摘がある。

卒直にいつて中国を本当に理解した発言はきわめて少なかった。……大会としては日本人の中国観と対決することから始まって、アジアの基本問題……にメスをいれる必要があったわけである。遺憾ながらどの会場からも中国に対して正しい理解をもとうとする意見は上ってこなかった（下：214・215 頁）。

朝鮮が原爆戦争の発火点となることを防ぐためにはどうしたらよいのかということは、今次大会の重要な論点だった筈であるが、在日朝鮮人の熱心な発言があっただけで、非核武装化のための具体的なプランは皆無に近く、かろうじて日中友好と抱き合わせで、日鮮友好の決議がなされたにすぎない。その奥に、日本人の朝鮮人に対する優越感（朝鮮のことを軽く考えるくせ）が働いていなければ幸いであるが、少なくとも大会が、朝鮮人のおかれている立場を本当に理解しようとしなかったことは遺憾だというほかはない（下：216 頁）。

こうした議論の背景には、峠三吉の『原爆詩集』を基本的には肯定的に評価しながらも、「作者の目が被害者の惨たんたる姿のみにむけられ加害者をも含めた悲劇の歴史性をうきぼりにする点に欠けるうらみがあった」とする今堀の歴史認識があった<sup>26</sup>。今堀は被害者としての「ヒロシマ」だけでなく、加害者としての広島・日本の役割を見据えていたのである。

さらに現在の日本をルーツにしない広島での被爆者、戦後のビキニ環礁で

の核実験による被曝者にも今堀は言及してゆく。たとえば今堀は 1955 年の第一回原水爆禁止世界大会について、次のように指摘している。

広島・長崎の被曝者が日本人だけでなく、数百名<sup>27</sup>に及ぶ中国・朝鮮およびインドネシア・ビルマ [現在のミャンマー]・タイなどの南方諸国の留学生や徴用の労務者、白系ロシア人ないしは捕虜の米兵が、原爆の犠牲にされており、その中に本国に逃げ帰った人も少なくないのだから、その救援にも立ち上がらなければならないのに、そうした要望は最後まで現れてこなかった。

[1954 年の] ビキニの「死の灰」事件では、最近まで日本国民であった、マーシャル原住民が被害を受けているのに、これを何とかしようという議論は、どの会場でも出なかった。(下：154 頁)

さらに注目すべきは現在の日本をルーツとする被曝者についても、被差別部落の人びとの凄惨な現実を描き出している点である。今堀は被爆の実相をまとめたルポルタージュで、広島における「部落差別」の具体例をあげながら、原爆でも「[被差別] 部落だけは焼きはらうことができなかった」と指摘している<sup>28</sup>。今堀の核兵器の被害をみる視点は、排他的で無反省かつ自己陶醉的な愛国心によって曇らされることはなかった。

たしかに今堀の『原水爆時代』には、「[全国的にみれば日本共産党内部の少数派であったが、広島では多数派を形成した] 国際派が八・六の当日、一人の犠牲者も出さなかったことは、市民の被<sup>マ</sup>護があったから」だという事実誤認の指摘がある (下：67 頁)。実際には 1950 年 8 月 7 日付『中国新聞』が伝えるように、在日朝鮮人が逮捕されている<sup>29</sup>。この事実を指摘したのは、黒川伊織の貴重な研究成果であり、1960 年代から 70 年代にかけての平和運動にアジア軽視が色濃くあったことは事実だった。こうした問題点を指摘した点に、近年の研究の大きな意義がある<sup>30</sup>。

とはいえ今堀の『原水爆時代』には、他の部分でも史実の誤認は少なくない。たとえば被爆の実相をはじめ報道し、ノーモアヒロシマズ運動の原点となった人物として今堀はバージェットをとりあげている。しかし現在では、

レスリー・ナカシマが被爆地広島を最初に報道したジャーナリストであることが明らかになっている<sup>31</sup>。

今堀の議論のなかの個々の事実認識における誤りを指摘することは重要だが、総じていえば、今堀は近代日本のアジア侵略の事実から逃げずに、同時に現在の日本をルーツとする人々の内部での差別の存在にも目を背けずに、核兵器反対運動を構想したと言える。さらに彼の議論は国内に留まらず、世界の被爆者・被曝者を視野に入れていた。

今堀は当時の運動が、現実的な成果をあげるための方策を模索することに全力を上げ、国際的な世論を形成するために現実的な提案をすることの必要性を強調した。当時の今堀は広島に住む中国史研究者として、平和運動の方針を立てるうえで、組織内部で重要な役割を果たそうとしていたのである。

## おわりに

1945年の夏を境に今堀誠二の思想と行動は、大きく変化したようにもみえる。だがその根底には、天皇制を含む日本に対する愛国心が一貫して存在していたように筆者には思われる。

この点にかかわって作家・瀬戸内寂聴（1922-2021）は、1980年の今堀の学士院賞の受賞に際して、「革命」的だと思っていた「先生」が昭和天皇の「思召し」を受けたことを意外だと述べている<sup>32</sup>。しかし1941年に北京師範大学の刊行物に掲載した論文の末尾に、今堀は「2601年 明治節」という皇紀と記念日を日本名の執筆者の中で唯一使用した<sup>33</sup>。1957年にも、次のように指摘しているのである<sup>34</sup>。

日本国民は占領されて以来、12才の子供だとか四等国だとか云われて愚弄されつくしてきた。しかしそんな場合にだってみんな日本民族としての自信というか自覚とか誇りというものを持っていた。

ただ今堀の愛国心は、日本の現状を無条件で全面肯定する（実際には時の政府の政策に服従する）ものにはならなかった。愛国ではあっても、愛政府ではなかった。たしかに今堀は戦時中に政府批判をしたり、徴兵を拒

否して獄に繋がれたりしたわけではない。その意味で今堀自身がいうように反省が必要なものだったのだろう。しかし反省の結果、今堀は日本人であることに、彼なりの方法で今まで以上に責任を持つようになった。

たとえば 1950 年代の国民運動について、次のような言及がある。

このように、原水爆禁止運動とほぼ時を同じくしておこなわれた日中貿易促進運動・〔在日米軍の〕基地反対闘争は、原水爆禁止運動と同じように、保守・革新の対立をこえて展開された点に共通性をもっている。……アメリカの政策と、そのアメリカに追隨する日本政府の政策にたいする、反対運動であった点に、共通点をもっている（下：140-141 頁）。

日本人として、敗戦後の祖国を自主独立の国家として民主的に再建することを今堀は課題とした。その意味で、米国流の、あるいはソ連や中国流の価値観から、日本の現実を批判する進歩的知識人にはならなかった。核兵器反対運動を進める今堀の立場には、既成政党や既存の国家から自立した独自のものがあつた。それをどう評価し今後に生かすのかは、さまざまな見解がありえるが、まずはこの点を確認すべきだと思われる。

また今堀は国際関係に対しても関心を持ち続けた。しかし、その前提は「アジアの民族主義がアジアのいずれの一角、たとえば中国やインドシナ、インドネシア特に日本を除外して実現を期待したとしても、行い得るものではない」との言葉にみられるように、アジアのなかに日本を位置づけ、アジア全体の民衆の自立と発展を願うものであつた<sup>35</sup>。

愛国心とともに、1945 年前後を貫いて今堀を律した今ひとつの立場が、ヒューマンイズムだった。それは中国社会への関心を深め、核兵器反対運動への参加を促した要因の一つであり、被差別部落の問題への関心の深さにも示されている。さらに、次のような指摘もある<sup>36</sup>。

貧乏は人間に与えられた運命ではなく、人間お互いが作り出している不幸であつて、貧乏をなくする仕事、今の日本にとって大切な課題であることは、誰も異論のない所だろう。

その外、女性問題への言及も多い。瀬戸内寂聴は今堀の葬儀に際して、1940年代前半の北京時代の回想を踏まえ、「フェミニストの先生は……常に女性の味方でした。そしてまた弱者の味方でした」と語っている<sup>37</sup>。それは今堀が人間性の尊重をなによりも重視し、自立した個の確立を追求していたことを端的に表現している。

そのためか、峠三吉への批判も厳しい。1953年の死後、神格化されかねなかった峠について、今堀は『原爆詩集』において、「ちちをかえせ、ははをかえせ」と歌ったことを批判する。いわく「父・母・老人・子ども・自分・自分につながる人間（無関係な人間は原爆にあってもかまわない）という順序で、儒教の家族主義の人間観を抜けきっていない」（下：19頁）。峠三吉の活動の意義を基本的には評価しつつも、今堀は「彼は特別に聡明な人間でもなければ、欠点の少ない人柄でもなかった。詩人としては未完成のままで終わった」と指摘しているのである（下：26頁）。

こうした評価に対する批判は当然のごとく多いし、峠の文学を語る能力を筆者は持ち合わせない。だが、少なくとも本稿で紹介したように、今堀が被爆者・被曝者をとらえる視座は国境を越え、国内の伝統的な価値観も超えて、普遍的に人間をとらえようとするものであった。この点は同時代の人々のなかでも傑出していた。

最後に今堀にとっての広島での研究・教育活動の意味を、改めて確認しておきたい。今堀が作成したスクラップ帳には、『いずみの友』の一周年を祝う同紙の切り抜きが残されている。『いずみの友』については、鹿児島県出水市平良町の「いずみの友社」が発行していたということしか分からない。

ただ加藤周一（1919-2008）が、「郷土をよくしようということで働いて居られる諸君に私は共感を覚えます。考えたことを実行に移し、実行したことから考えをひきだすことが、いきなり天下国家を論じるときよりも密に行われるにちがいないと思うからです」との言葉を寄せていること、在野の民俗学者として活動した谷川健一（1921-2013）の「郷土の青年運動」との表記から類推すると、地域の文化をその地域の住民、特に青年たち自身が発展させようとしたもののようである<sup>38</sup>。

今堀の一周年を祝うコメントは、以下の通り<sup>39</sup>。

真剣に、誠実に、そして平凡な庶民として、毎日を生き抜いていこうとする若い人のいぶきが、身近に感ぜられます。貴方がたの真面目な生き方が、本当に歴史を動かしていく力となるのですから、勇氣と自信をもってまっすぐに前進してください。

スクラップ帳の同じページには、山口県の周防大島<sup>あづのしよ</sup>安下庄で開催された「今堀先生講演会」のビラもある。ビラは「おなじみの今堀先生」といい、テーマは「農漁民のくらしと教育」で、「漁村教育は郷土安下庄振興の基盤です」、「身近な農漁商の私たちのくらしをみつめつつ共に考えてみましょう」と呼びかけ、「お父さん、お母さん方たくさんお出かけください」とする。平和の問題も含めて、今堀は地域にこだわることで学問を人びとに根付かせようとしていたといえよう。

少なくとも本稿であつかった時期の今堀にとっては、広島という地域から学問の意味を問い、核兵器廃絶を目指すことが重要だったように思われる。そして広島大学において学際的な研究・教育を実践し、本来の意味での教養教育を構想し実現する部局として、今堀は総合科学部の創設を提起するに至った。その今堀の知的営為の核心的部分を担っていたのは、中国史研究でありアジア研究であった。そのことは、他地域・他分野の研究の重要性を否定するものでは当然ないが、中国そしてアジアを研究することが、日本における研究・教育機関にとって、いかなる意味をもつのかについての一つの解を示しているように思われる。読者諸賢の批判を待ちたい。

## 注

<sup>1</sup> <https://kotobank.jp/word/今堀誠二-1056411> 2021年12月19日閲覧。[ ]内および本稿の今堀の経歴については、今堀誠二「アジア研究半世紀の軌跡」今堀百合子編『アジア研究半世紀の軌跡』（今堀百合子、2002年）i-v 頁や、今堀誠二『原水爆時代』全2冊（三一新書、1959年・1960年）の上巻の1・

104 頁に基づき補綴している。なお今堀百合子は誠二の実妹で、今堀の学生時代のレポートや『広島大学新聞』掲載のエッセーなど、本稿で使用した史料の一部は、創設 30 周年を前にして、総科が 2003 年に百合子から寄贈を受けたものである。その受け取りには筆者と徐皓が当たった。

<sup>2</sup> そもそも「東洋史」という研究領域の設定自体にさまざまな議論がある。今堀自身は戦後「アジア研究」と言い換えているが、問題の本質は変わらない。この点については、『論点・東洋史学：アジア・アフリカへの問い 158』（ミネルヴァ書房、2022 年）、とくに監修者の吉澤誠一郎の「序説」が参考になる。ただし本稿ではこの問題には深入りしない。

<sup>3</sup> 1978 年に広島大学文学部史学科東洋史学専攻に入学した筆者は、総科の地域文化コースの諸先輩が、「総科の学生は生きた中国・アジアを多面的・動態的に理解するが、文学部の学生にそれはできない」と意気軒高だったことを記憶している。当時の地域文化コースには、諸地域・諸科学の専門家がおり、学際的な研究を通じてそれぞれの地域を全体的に理解しようとする意欲に、教員も学生も溢れていたように二十歳の筆者には感じられた。

<sup>4</sup> 今堀誠二「東洋史学は光に面するか闇に面するか」『歴史評論』第 155 号、1963 年、2 頁。

<sup>5</sup> 前掲、今堀「東洋史学は光に面するか闇に面するか」2 頁。

<sup>6</sup> 今堀誠二「広島大学総合科学部の現実と課題」前掲、今堀『アジア研究半世紀の軌跡』223 頁（原載は広島大学大学教育センターの『大学研究ノート』第 20 号、1975 年）。

<sup>7</sup> 日本における中国研究についての最新の分析に、小野寺史郎『戦後日本の中国観：アジアと近代をめぐる葛藤』（中央公論新社、2021 年）がある。

<sup>8</sup> 岡本隆司『近代日本の中国観：石橋湛山・内藤湖南から谷川道雄まで』講談社選書メチエ、2018 年、146 頁。本書に対する筆者の評価は、『アジア社会文化研究』第 22 号、2021 年を参照のこと。

<sup>9</sup> このレポートの末尾には、「立論堂々として、一家の見あり。……余輩は刮目して、後生の畏るべきを俟たむと欲す」との朱書きのコメントがある。

- 10 今堀誠二「宋代社倉制批判」『師大学刊』（国立北京師範大学刊物之一）第1集、1942年。
- 11 前掲、今堀「東洋史学は光に面するか闇に面するか」9頁。
- 12 今堀誠二「学界時評「資料学への沈潜：支那社会研究の現段階」『大学新聞』1945年8月21日。前掲、今堀「東洋史学は光に面するか闇に面するか」11頁では、この時評を1945年3月に執筆したとし、「本論文」はこれに「つづくものである」と位置づけ、論旨の変更を不要としている。
- 13 今堀誠二「大衆文化建設へ：戦時下の重慶文化について」『大学新聞』1946年2月11日。
- 14 前掲、今堀「東洋史学は光に面するか闇に面するか」5頁。
- 15 今堀誠二「北京文化の省察」(4)『東亜新報』1944年5月22日？（今堀のスクラップ帳には日付の記載がなく、同前(3)が5月21日付であることから類推）。なお『東亜新報』は北京で発行された日本語新聞で、戸塚麻子・神谷昌史「『東亜新報』の編集局・論説委員について：『東亜新報』研究のためのおぼえがき」『常葉大学教育学部紀要』第39号、2019年などがある。
- 16 今堀誠二「転換期の文化科学①」『東亜新報』1944年10月15日、同前「転換期の文化科学②」『東亜新報』1944年10月17日。
- 17 前掲、今堀「学界時評「資料学への沈潜」。
- 18 千代田謙の経歴については、ドイツ近現代史研究者である長田浩彰（広島大学総合科学部教授）から教示を受けた。記して感謝の意を表す。
- 19 今堀誠二『中国の社会構造』有斐閣、1953年、329頁。
- 20 前掲、今堀『中国の社会構造』1頁。なお『村八分』は近代映画協会の1953年の作品である。この映画は1952年に静岡県で起こった不正選挙を告発した一家への人権侵害をもとに、新藤兼人（1912-2012）が脚本を執筆した。
- 21 今堀誠二『北平市民の自治構成』文求堂、1947年など。
- 22 今堀誠二「東洋史の問題」『月刊世界史研究』第3号、1950年1月20日、4頁。
- 23 以下、本節の引用符を付したやや刺激的な文言は、前掲、今堀「東洋史学

は光に面するか闇に面するか」からのものである（1頁、3頁）。

24 今堀誠二「原水爆時代の部落問題」『部落』第11巻第8号、1959年、4頁。日本の平和運動については、すでに水羽信男『ヒロシマ平和学を問う』丸善出版、2021年で論じており、本節との重複部分も多い。合わせ参照されたいが、拙著には誤字が極めて多く、本誌に正誤表を掲載した。被差別部落の問題については、東上高志『部落問題とは何だったのか：東上高志の仕事』全3巻（部落問題研究所、2020-2021年）および黒川みどり『被差別部落認識の歴史：異化と同化の間』（岩波現代文庫、2021年）などを参照されたい。

25 峠が核の平和利用を讃美したのは「朝」である。岩波文庫版『原爆詩集』（2016年初版）の解説を書いたアーサー・ビナードは、米国の資金提供のもと、日本のメディアによる原子力「平和利用」キャンペーンの前に、「朝」が書かれたことを指摘したうえで、この詩に「諷刺性」を認め、峠が長生きをしたならば、どのように「平和利用」のペテンに切り込んだらどうかと問題提起している（157頁）。しかし筆者にとっての興味は、社会主義による「正しい」核エネルギーの「平和利用」という「神話」の形成と、その崩壊のプロセスにある。

26 今堀誠二「峠三吉：原爆戦争に抗して」芸備地方史研究会編『人物広島史』三国書院、1956年、99頁。

27 今日ではこの数字は少なすぎ、当時広島にいた朝鮮人だけでも、被爆直後に5,000～8,000人の死者が出たと推定されている。現在の日本をルーツとしない人々の被害については、広島市・長崎市原爆災害誌編集委員会編『広島・長崎の原爆災害』岩波書店、1979年（普及版：『原爆災害：ヒロシマ・ナガサキ』岩波現代文庫、2005年）を参照のこと。

28 「原爆の地」『日本残酷物語』（〈現代篇第1〉引き裂かれた時代）平凡社、1960年、389頁。このルポルタージュに著者名はなく、末尾に「現代篇I了」とだけあるが、国立情報学研究所のデータベース（CiNii）は今堀の著作としている。

29 黒川伊織「今堀誠二『原水爆時代』再読：1951年「原爆記念全国平和会

議」の位置づけを中心に」『原爆文学研究』第13号、2014年。黒川には『帝国に抗する社会運動 第一次日本共産党の思想と運動』有志舎、2014年、『戦争・革命の東アジアと日本のコミュニスト：1920-1970年』有志舎、2020年もある。あわせ参照されたい。

30 川口隆行『原爆文学という問題領域<sup>プロブレマティーク</sup>』（増補版）創言社、2011年など。また川口は「『われらの詩』と朝鮮戦争」（『日本学報』第33号、2014年）で今堀について言及しているが、筆者の立場とは異なる。

31 「ヒロシマ打電第1号 レスリー・ナカシマの軌跡」（『中国新聞』への原載は2000年） <https://www.hiroshimapecemedia.jp/?p=104249%2F> 2021年12月25日閲覧。

32 今堀誠二『中国と私、そしてヒロシマ』溪水社、1988年、26-27頁。初出は『社報 RCC』1981年1月号に掲載された瀬戸内寂聴との対談である。

33 前掲、今堀「宋代社会制批判」70頁。

34 「座談 映画と文化・社会」『ひろしまと映画』広島県興行組合発行、1957年、7頁。

35 今堀誠二「アジア民族主義の背影」『広島大学新聞』1951年2月10日。

36 今堀誠二「「学問」と「生き方」：学問のための学問か、生きるための学問か」『広島大学新聞』1955年6月1日。

37 瀬戸内寂聴「弔辞」前掲、今堀『アジア研究半世紀の軌跡』317頁。

38 広島における地域文化の意味については、水羽信男「広島の平和文化運動史研究序説：土屋清の『河』と劇団月曜会の1960-1980年代」『拓蹊』第3号、2020年を参照のこと（『拓蹊』第3号は電子出版物でURLは以下）。  
[https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/ja/list/HU\\_journals/takukei/--/3/item/49179](https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/ja/list/HU_journals/takukei/--/3/item/49179)

39 今堀・加藤・谷川の外に劇作家の木下順二（1914-2006）と民俗学者の宮本常一（1907-1981）が寄稿している。この5人は日本の地域の民俗にこだわり、中国に関心を寄せており、地域に根差した文化を築くうえで、鹿児島  
の若者が期待を寄せた知識人が、どのような人々だったかを示唆しているように興味深い。